

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-28

節章句秘伝之抄

老したふ吟て一^百十^五年よか^うて^んの^こに^まさ^にな^らん^え
 ろり板佛祈^るる^一た^んの^いれ^りま^とま^しり^や女^の吟^{なり}
 ま^のい^まり^と信^く法^文の^ら故^と又^まま^のい^んの^心に^ま
 て^おり^ぢり^ら一^つと^とま^しり^やの^かわ^か
 拍^子の^まま^に拍^子の^まま^に拍^子の^まま^に拍^子の^まま^に
 一^周寺^小町^住子^都部^安小^町の^いれ^りま^とま^しり^や
 一^つと^とま^しり^やの^かわ^か
 一^通小^町住^子の^いれ^りま^とま^しり^や
 る^やし^一つ^とま^しり^やの^かわ^か

一夜^ての^いれ^りま^とま^しり^やの^かわ^か
 小^町住^子の^いれ^りま^とま^しり^や

一^信重^住子^のい^れり^まと^まし^りや^のか^わか^のい^れり^まと^まし^りや^のか^わか

一^錦木^住子^のい^れり^まと^まし^りや^のか^わか

一^玉栄^曲舞^小袖^常我^のい^れり^まと^まし^りや^のか^わか

下^まの^いれ^りま^とま^しり^やの^かわ^か

一^小曾^て入^りて^畏て^承れ^しと^まし^りや^のか^わか

一^西白^のい^れり^まと^まし^りや^のか^わか

一^西白^のい^れり^まと^まし^りや^のか^わか

一 少くも若くまりに静まらざるなり

一 清静なるも静まれば死しふれざるをといひて一人の
まことしうたんとするなり静まらざるなり

一 兼平位に服あり少静まれば曲舞かかるといひは
の上とありたり信しまり静まらざるなり

一 道盛まより八高月日に世を志のしと月位し

一 忠則いふ静まれば六法不に思ふれとまわらざる静ま

うしぬなり

一 京流にまより志むる程の位なり

一 雲風一せい井と心はくは秋風と信なり松よ自ら

なるまに心ちとあり一は二間女か行くるを様や

子一子のつらおとまわらばくはく信へしつらき

なあまは行年此かまあることまわらばお娘しんお

一 一はの舞より二間程なり

一 狂心草木よりわらわることまわらば何そく信や

胡のまはりてくはふまは信はるる信強なり

うい車とせよとまわらぬやうなる信し曲舞

狂風よりなるや信し月夜に狂風よりかまわらざるなり

經母乃因いふも五のケ子平一もあし初孫のさゆり
ゆらり松風舞まりるやといは是二孫のり
ありけふくは入は由三人のり也

△右八拾九番大夏雅居秘教種沙批
不深の間ふ孫令相傳乎智不可有他言
也也

元龜元年三月七日 小倉亭五判

一 謠を本書秘教種にいふるも難法は天竺とい
文唐エノ詩派我朝底俗ヲ台一也一字其あり

我朝無のり一首ソ安先五七五七七異也
五行したとて不のくと云く我師のいはと分あり
カテツカイタレクイシシヤウラサリマラマノ夕ノ印目
云ラ付へし句ノ印めテ又ニテ云ろと云付るるいよ
め同教うり字切て其能くは心得ノ書へし

庶永二〇七月日 恭信安 在別 親世十席入道

永享三二月廿日 台竹 候

長祿三二月七日 宗平 候

文明十六土月日 先安 候

音曲灌頂之卷

凡音曲の巻に不さると云い秘受す一三才一折之
夏一身三折大秘事の事才一の不さるたり才
是乃おさると云い才思と云い任吾大明神一才三
折の大受、任吾大明神 田口人丸 八幡大英
但田口の人丸と云い一折才一何も不代河津陸べ
元前津陸大三字一折才一故一才三折と云い
凡流言ふうたいに神三折なり

歌云

ねおまのほぬ初と云いおひてさういふく老しにた
とてさや難波のつゞ燈籠のかくも家老よと云い
老うくたえと云いせと云いて下と云いておとす

△是音曲乃本心如来のへ打ちり

詠音曲の次才三才現至末末と云い

一任吾大明神 田口の人丸 八幡大英

善日大明神

一三才の旁 伊勢 任吾

世の中いづきと云いで我を能くおぼす取寄ると云い

一 現至乃奇 八幡 皇ノ人九

多岐代ワレノ風をさしむる行末までぬまひつそり
一 東來乃奇 春日 大内社

凡好上よりて定ぬり其方大内社も其風をぬまひつそり

右も三三在在末末家心三三世世曲味も三三三三あり

三カ一祈と云二社ありつと云と音曲のたつたつた

口りたて祝ままへへ又三カの内ありつと云と

うへは法神法佛の感應よ不入三カ一祈と曲は

ありつと云へへ三三三三三三三三三三三三三三三三

一口舌唇乃三内河法法三三三三序破末宮南前假

羽呂律の風歌曲味といひなつらつらつらつらつら

四口の人九と云人風後一曲はつらつらつらつらつら

く風をく一曲乃たつらつらつらつらつらつらつら

おまるとそり一曲の内は過三三三三三三三三三三三

多岐三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

八白の雷のまど昔と云三三三三三三三三三三三三三

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三三

いひをみねを同じふはとて考院を以ていひまね
いし位音の先にては袂もく侍りてとて末ふ乃
の初めはのんとふらんとてとて院を末ふとてい音曲
三月三内三曲といふなり是はかへり一音の音曲は三心
と初(一)るなり三心うれ一音の流うて流初を三
流まうていひまね(秘)なり

一音曲は行の初より上りの流より下りて末なるに
一はれかノフコトとてちりちりかきとて中りてしとてはちかめはとてしとて
けのいとはとて大まな流の初めとてまなりとて音もまな字あり
下りてりまの初りつて初へ入りてりまの初りてりまの初り

角の入まき初へ入ると角へ入るとりかめりてとて
流も何となくうはくしりてとの流より行初めとて
一音曲の初り初めと初て流の初りてりまは初りてりまは初り
吹けは初りてりまは初りてりまは初りてりまは初り
一てりまは初りてりまは初りてりまは初りてりまは初り
流初を三心うれ一音の流うて流初を三

一音曲とて人と異なり時心を釋めいと三心のいふ釋は
りてりまは初りてりまは初りてりまは初りてりまは初り

一言は初りてりまは初りてりまは初り

初心用心のためにも一字は待てぬ

も思はれやうとんとて半ばつたなももささきおな
口とまてのうたかろのうた口古信れま曲とまふ
おれやうにれんもまもまにまふはまぬま曲に
ま曲にま大竹おとくまてはゆもまにまふまも
うまぬやまおんまをわ口ままをまに後まゆひてもえよ
ま曲まも初おまをえまなるま用とてまか人用と
まままにま祝言とまにまてゆまかまをまのりま
まんのままにま何とまよまもまれおまにまままもまよ

まままにままかまなるまなれに初おまをまのりま
まらま上れゆりままらまら初おれまらまらまてまままま
ま儀もまもまてまらまらまらまらまらまらまら
まら初ままらまらまらまらまらまらまらまらまら
風雨酒まをまらまらまらまらまらまらまらまら
つら初とまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

三つとみおとを同様にさすもいふまゝなりていふ人の

祝言のこゝろを中へいふとぬをばさる事とこゝろを

ふかりれどもはいふるをさすてもおとほりれやん

徳徳小徳徳をいひてをさるゝいひかたりまてし

系いふるかたりたりの人平をさすて徳徳にさるゝまてし

始にさるゝ行て音曲いふ一人をさるゝまてし

そ人のす子といひさるゝかりにさるゝいひ徳徳をさ

都より下りて人の徳よ。毎ツツりさるゝ曲にさるゝ

にたれといふことありて曲にさるゝ物さるゝ

ふふたといふ田の粒を流りさるゝてへんすゝを

口代中とさるゝ得をさるゝいひさるゝ人いひ

當りさるゝ下たさるゝて徳ふ人のさるゝいひさるゝ

まていふこといひさるゝいひさるゝいひさるゝ

下と地とさるゝいひさるゝいひさるゝいひさるゝ

音曲いひさるゝいひさるゝいひさるゝいひさるゝ

三つとみおとを同様にさすもいふまゝなりていふ人の

祝言のこゝろを中へいふとぬをばさる事とこゝろを

書中と序破巻を愛の心と入行要上中全れ久

是音曲小鏡也

右は二母各々といはせ音曲はたをそそぐま
てらるゝと入行音曲六三四段と流をそそぐ心
たけてらるゝと入行音曲六三四段と流をそそぐ心
はた入魂のまをそそぐまをそそぐ心とそそぐ
せよと右かたやそそぐ不後といはせもろく
流はた入行のまをそそぐ元安流風とそそぐ
他物目し流はた入行のまをそそぐ元安流風とそそぐ
そそぐへたそそぐ心と

應永三年己卯七月日

享祿五

月峯

世何他

右は書物泊瀬ノ親書也授叔世の世流
傳へ子息音阿流授音阿流子の小次席傳
小次席子の真正傳也

一調 二振 三聲之次方

一調と定一番の調子とそそぐ心と所よりそそぐ心
そそぐ心とそそぐ心とそそぐ心とそそぐ心と

ハハニ調子と書きしなり。ニ振とみうつと又用
と云て申入彦とんは物と信じて物と云ふニ振は
まてんて取り布うけくくく系やとけき織布
うけくくくと澤ちさうけくくくはんわすく
系とわすくくくくくくくくくくくくくくく
又字板系より洗くく又洗つり、つすくくくくを
信いそくても又字うけくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ちひいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の信ろくく夜まれおをいゝ信を――出まうく出
云れおとととと――五毛のつくくくくくくく
――出れおとととと信の又字とけいりやゝ信を――
△石じ入道記記記記記記 石判

一利をりやとたはと云ふくくくくくくくくくく
云物く同じ故わく故とけい物くくくくく信を木
かゝ信りりとうくくくくくくくくくくくくく
云く則又うり代口特くくくくく

一三曲と云々曲は三ツと云々にて何ぞ三ツと定むれば
天竺人の三三のちりり上中下は三ツりかき物なる
又音三曲と名付たり三曲は口傳に不事なればい
三ツりかき一受口傳に三曲は行不しん

三四ト音曲園遊曲は三ツり音曲ト云々ト如ク
ユラクトフクトトト也音曲ハ秋の野ニイハラフタチノ草
ノ花カアムカヤアトノ乳合タルパツク前アノ園ノ草
キトラセハ秋ノ大支曲ツクリタルソト也音曲ユラク
カメラカセタルソト

一横登の二字と云々はことなるやうにいふに云ふに口傳と

いふと云々は横登に云々の音はいつか云々云々
云々云々の横登の二字と云々は横登に云々の音はいつか云々云々
と云々云々の横登の二字と云々は横登に云々の音はいつか云々云々
は二字は云々の横登に云々の音はいつか云々云々
云々と云々の横登に云々の音はいつか云々云々
秘ト云々の横登に云々の音はいつか云々云々
二字は云々の横登に云々の音はいつか云々云々
一ぬと云々の横登に云々の音はいつか云々云々
知ると云々の横登に云々の音はいつか云々云々

年て息ともまゝく流しぬくをいふと云ふと云ふは
と云物いふりて流しぬくをいふ五音いふたふ
は二字をいふ用と云ふはいふはいふと云ふ事
麻痺流ぬぬ世に流しぬく流しぬくと云ふは
るうの時中く流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事
進上は江中流ぬくは時又音と云ふは流しぬくと云ふ事
一信ヲスツまけぬと云ふは佛王相死老若青黄赤
白黒地水火風空五輪は輪はもつわけては流しぬく
と云ふ事と云ふ音と云ふは流しぬくと云ふ事

世よへエラと云ふは子御と云ふは五ツまけぬと云ふは
と云ふ事と云ふは流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事
く流しぬくと云ふは流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事
ふまけぬと云ふは流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事
一調二指三指と云ふは流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事
口傳と云ふは流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事
流しぬくと云ふは流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事
一石五音と云ふは流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事
と云ふは流しぬくと云ふは流しぬくと云ふ事

一 謡よりりてをこく花傳をるるは 謡謡の曲章より
きんえは抄つと云 ちんえはかんぶ、さうくよと云わし
何とく、さうかむ折行 要なり

一 任舞よりりてはしこむやうまへくして

一 一章より曲章内なる曲章の謡は何れもそと

一 一の謡思ひいへば謡何と云ふかひやうま

一 一人の謡は謡はうとそとくはんや人の謡は何れも謡は

一 句にて句と切あうくせんや何れも同

一 上はよもりあけかよとてまよま、女は何れもよと男弱

何れも男の力なりよとて、口傳をさうく

一 さのちを乃付切あうとそとく謡はうまへくは

一 一かこいと云て大受方り秘しや口傳をさうく

一 一かえらうとそとや一あともとぬるやと云てさうく

一 一曲章の内はめのみき肝要也謡は口傳をさうく

一 一え眼乃謡はうまいとそとす、いむ計り打をさうく

一 一舞の内ちり乃謡はうまいとそとす、いむ計り打をさうく

一 一むこよめ乃調子若井按よりり、長とこのこよめ

長とこよめ乃調子若井按よりり、長とこのこよめ

女物とくく夢ヲ夢をみくたま云ては曲平歌の
マコトク——それとが人のこと云。

一 正の夢なるよらうらふか久はくいいたくく何とよ
らままの洞の上のまま云ては富土中も先はくは白
狐の類と考ふるく云て又常山とていふこと——
一 小臣山木常吉の取飯山日守く天ノ鬼神なること
いへること日—又正士傳ること日守は人類神といふ
る事—女とてさうまるといふ—他心かきこ

一 夢の幻視にけりあまうかいと云はれ世はせき海の力と云

乃兼徳こまると云

一 水波乃とみかみ大夏で口傳えらうく

一 雷ねると此を別大事なり先よ同

一 一哥は曲のうらうらと字よまうら——とこそ尸傳は又
能ふそらうらと井筒おのまうらとふうらとねたはけ、
たかく釋よまうらとてんこり

一 柳邊松川百万らとらとまやかる——をまげと

ままこまらう

一 无松能松能、吳能うらうら、喻能能なりて這釋也

一白采天 海島 源氏 棹山 同

一尺もさへ 我生 移羽 是日

一うりちおりよ源氏乃独をく少おはく信とえり

一平泉 移よりちとくそく云あり

一鬼神 独をを 枕の鬼 牛 取らまを云鬼女

何とく 同まこと入るも独の口傳

△十又の次す

一三呼氏より曲ニ曲のふ折曲三折のふ曲にまなり曲

又三曲五ノ曲六引声り曲て初ノつきの曲八折拍き曲

九聲 枕の曲十一の曲十二節儀 曲十三拍子音曲

十三古極うき曲 十四同曲ニツ并曲十五長く云りみ曲

右まじりり

一三呼氏より曲とは三のまじりきく曲と入まをせにて

同三のまじりきく曲と入まをせにて

にまのまじりきく曲と入まをせにて

一二曲乃の折曲とま何まじり独をといは曲折先と云

か、なりてうまひけて曲折やまけぬまじり曲折とを

よくまじりり

一三 詞の歌に云ふまゝに云ふにても記考りやても云ふ
而を知ると大まほしく云ふなり一 陰くくめをくくめ
人かまはしうとて曲と云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふなり一 思ふなり

一四 三行の曲と云ふ大抵たふしと云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふなりてくくく入てありを云ふなりてひくく一 云
と云ふと云ふ云ふと云ふなりてたぬ板を云ふ一
と云ふ云へて云ふなりて又云ふと云ふと云ふと云ふ
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

一五 信名の曲と云ふ能信の甲か云く又云ふ云
中流名の曲と云ふ信名のはと云ふ信と云ふ一 序破
と云ふと云ふ一 方有是と云ふと云ふと云ふ

一六 引る曲と云ふ事信留りしなり引るを云ふ引
いくと云ふく引る一 云くくくくくくくくくくく
一七 初乃曲と云ふ事信留りしなり引るを云ふ引
云ふ一 云くくくくくくくくくくくくくくくく
と云ふく一 云くくくくくくくくくくくくくくくく

一八 祝揚子と云ふ事信留りしなり引るを云ふ引
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

ゆり鈴いりんたまえお曲り人・祝物種類口傳

ゑんぞく

一九三声祝の曲と三つ又娘の字はひのそととんで次のすかへ
あまし又まのしりれひもそほひきていひもをを

ゑんぞく

一十のり曲とまゝお傳りてゆり人くまゝさうてつるも

下していひぬくみかきしゆゑと務るゝるりませ

字はれはまわくとゆり人てつるもさやくゆり人

一十二節儀のつるもとまゝの音ちとるくこの曲い

人信がしゆりて曲囀るるありちとまゝよまゝ

一十三節のり曲と一節よまゝしてはくわと二節よま

つく一節よま切ありくと初乃切やまゝたまはの切也と

まぢやあして切物よまわが天化まゝしりしつるハ

物よまて月々々物解まゝやまゝは信のてまぢて

いこもる

一十三節ちりくま事字は一ツほはくくとこの年ふだ

そと具まゝえ替よ吉とよむもとまゝの歌とまゝ

一十四節ちりくまのり

一十五節日と曲乃二つりてはちとまゝは乃りしは二曲れ

あるとて初は曲とまゝまゝはてあまかて面白く

いこちり

一 丁太夫より三太夫まで言振るりありへ夕夕灯籠火
宋女 忠信 次信う(まの)へあ、大松火振打ぬ
夢 七夕あつめるうとよ上あはや

△音曲第一口傳

一 調 二 振 三 声 先一調上調さし二振ささうの振し

一 吹物ハ調子を林のうらた板をさしをていふやいと

三つはさしよむさしりてをていふのささす調子

よのふへいひ林さうはさし林口傳をへい

一 振をさしはくはへいさりの振れささははは物と云

多きはさし曲とハ振さしにぬささうり哈ハ振掃とさうり

たてくささていめさにてふとえささくさく曲のさく

憶よきことおりのたてさ高ぬさく曲よ文曲とささぬ

憶よきことさ文曲はさささりてはて曲とハささく

憶よきこと文曲さささいさささささささささささささ

一 三声ハハ調子をさささ林さりてさささらしてささすとさ

ささささいとささささいとささささいと

一 祝言乃由と云ハ先時此調子までおりとささささささささ

一 春と双調でも色青と味どいハ地茶師女来で

一夏 黄鐘色赤し味ニカシ不地祝音

一秋 平調又白し味カラシ不地祝音

一冬 六盤涉又黒し味シハト本代天 equal 不

一土用 一越 又黄也味アコシ不地不日如未

一時乃 浦子ろと又と一越 盤涉ハ人笑し祝言ハ音鏡

とハハハ 但度ハ人々一ト是ハ口祝也

一祝云此曲トハ昌々ナリ揚子其娘の一口と云々

そとくと三此口なりと曲終ると云々

一表傷ハ聲ナシ云々伴ハ形ノにむスハ

一くと和ハミに祝うる系をこくつあや

一久々まじくとくさつあや一ちなり

一替古とほくろれまじ———と云々

又もせ花と紅雲とまじりやうん瓜ふしの秋ハ夕暮

一又庭ハ草代ハハハ云々

何う 此云 王はまる 氏はる まじり

一きり三ノ入の時ハ守 二庭をまろるる

△音世聲 出ス口傳

一調 二指 三鼓

洞子を扱ふを以て云ふ物の洞子ままもさうて扱ふあ
てをさして目録ふとなく息とらり(引て扱ふをさ
いせんとく)此洞子の中よりなるや洞ふしを言
たりて或ふもあてをさして扱ふとせんとく此
洞子と扱ふはさうさうなり一洞子と扱
ふはさう扱ふをさすは二調三声と云ふ
又云洞子を扱ふはさうさうなりをさす洞子をさすは文字
をさすなりて一文字ふとめぬ程は曲をさすか
なりさうやうとさうなりていふとめぬ一毛詩云情

放於声成文謂之音真ハツシツアテリ

- 一 音曲乃習言二声ははらへ一腔のふとかく人の
曲をいひてふはさうつりを美しくはくふとく
一 又うたぬ人の筋をけくふはさうなりをさすは
まらうてさうに成く又音なりとくうつり又文字
くさうりのまらうさうさうてあひくともはさう
何れも根ふは内さうをさすはさうなりてさうへん
曲のけりさうさうなりをさすはさうなりてさう感
はらうなり一毛詩云情乃けりさうさうはさうなり

久遠まうにアズクワシとては流の曲の飢食のかり
よりぬしう（初）のり入さうけりぬべいんい
し横も同じ物う曲と云時ハ習儀別でと聲有古と
云にあり然して曲は三き曲は志して洞きとて思
何まといと終て初まはまことと云り又音曲と習目
多し先み字とさうとてはた高と極なりとては
下とて父なるうとては和の位を知ると後心程と
初まは洞子（初）初中極ははし

一曲はなまうとて高なりたはありはらうとてみまはまう

る海一文字おもより二つは文字に章う遠へん
なまうとてたさうとてはくのみま字表章してよえぬ
ままの章に云なうとて洞の吟のろをわたりて章う遠へ
うしあはとけしんくうかまあ極ははらけては極とてし
てはたのみ字表うてはにのまひてはわ極のをさうらぬの
字ままがわがごとくはわつとてけきんくうとてわとて
はわとて大略てふをえはかま字表わや極とてまら曲
とていあらはくはらうとてえぬはまのまは内といろ
のくはらひくはらてはにままの字おそてはなまうとて

四聲代夢口傳

再其去入聲

五音合習



此四声ノリニツニ充分

十二調子ト云セ

一 聲ははつとあはしむとたる時さうしなるといふ
る一 聲の葉ちと申すもいふひあるはふ
たものもなる一 聲ははつとあはしむとたる時さうしなるといふ

る一 聲の葉ちと申すもいふひあるはふ

とたる時さうしなるといふ

あはしむとたる時さうしなるといふ

あはしむとたる時さうしなるといふ

あはしむとたる時さうしなるといふ

あはしむとたる時さうしなるといふ

あはしむとたる時さうしなるといふ

あはしむとたる時さうしなるといふ

あはしむとたる時さうしなるといふ

小の如く、呂と、ラ、リ、を、聲、年、の、声、也、
 伴、と、云、悲、し、む、智、入、息、と、云、先、根、不、修、は、は、
 根、め、は、祝、云、れ、智、は、根、を、祈、に、て、根、を、智、と、行、を、
 出、と、希、く、是、は、是、の、音、希、也、呂、乃、聲、根、也、
 根、と、希、く、は、は、は、は、息、を、出、に、は、に、は、り、
 是、呂、根、を、た、ゆ、ふ、智、く、先、祝、云、し、と、と、
 の、希、と、云、章、と、祈、う、て、根、を、切、く、と、是、で、
 不、か、は、よ、え、は、ら、り、是、は、根、根、根、根、根、根、根、
 入、り、し、然、る、は、は、と、く、と、ふ、付、去、程、は、祝、云、れ、希、

小は根を切るゆへに調子のとらへてつこうとく
 根をゆりくるといふは調子のとらへてつこうとく
 一音曲は四章と多くは五曲といふはつとわけて四章と一
 一道くわりぬらぬく、て音曲は五白の習目と云い
 各字小は曲は五章と云い、おはとも曲と云い、
 曲章、高、く、う、ま、り、て、別、曲、有、り、と、お、は、す、
 同、と、云、い、四、章、に、拍、子、の、拍、と、云、い、て、強、を、希、く、
 所、と、り、て、拍、子、と、云、曲、を、つ、り、先、曲、章、に、拍、子
 の、拍、子、と、云、い、曲、は、五、章、と、云、い、五、字、と、云、い、

云程は曲原と云ふにたしてうゝ子然るう凡そ
かゝる音や也我昔々名別のすまゝく久世原に
曲原は尚道やと音久くふまゝなるやと
近代曲原はやとてかゝるやと偏一はう
うゝてとよ面白く面白くやうなる友よあ時
えはる曲原はかゝるやと一のものも何そいと文はり
是に七又孫乐は孫は曲原とてうゝてとを
一にらうては曲音くもて何そいかり白
乃曲原は曲元即ちま程は曲原とて曲とて
や原は音曲とてつけりる方程曲原はかゝる
をうけてかゝるやといふは曲は道かはちり
と人とも曲原はかゝる曲とてかゝるも曲原
とてうゝては面白くやと肝要とてとを
とていふや

とていふはかめとまゝとて道とてかゝるを
師とていふはかゝるやとてかゝるやと

一 神曲原は音曲のまじりて云曲原拍子を祢とて
曲とて久字を拍子とて文とて句

花よりなほをまきし雨をよきとせぬまら
るや文よりやうりは狂とぬ雨とさうり

祝言

- 一 是引乃山下あきるやも須のまぬれ教はまら
- ぬれ今あきる川れ激くちる根とゆえを
- 一 子代不れ凡もまらりやう
- 一 是らのくははくとちまるとまらりやう
- 一 多に宿に池中れ樹僧は教月下門 サレコト
- 右に集し世の心曲もなほ松倉也不有か見也

応永五年六月日

世王辨

他平云

- 一 音曲まらまら雨まのさう雨りうははちまら
- 了し柳まはらまらぬらひだねえのさうしは
- あはれまら

- 一 懐まらまら雨をまらぬらまらまら
- 一 伊勢のりまらまらまらまらまら

又此地位ニ亦まほしくあり

一助音のまゝと人志易息とほらまらやうまゝと
ろり皆人の心息とつゞきまゝとまゝと

一うゝの内ニ二字はじむ字ま可心得は法儀いひ
くこと小下とわニ此れ字とてりニ字とせむか

一法をニ字のりいひむとる

一初らると法儀と初は言ハ一乃ニ分ハん
を法也とる

一法はいひを教と稱をぬきむたるとかとも

一法のとい念珠とまゝとまゝとまゝとまゝと

一物子のうち法ははい申れんきとまゝとる

一福のうらまゝとる一馬口傳法可羽と

一人物あゝ御前のかむれ初法先の人身先ツ目と
まゝとる

一初をいひまゝとる御子まゝとる

一まゝとるまゝとるまゝとる

一まゝとるまゝとる

一此物子の内ニ法とあり法とまゝとる

一 音書より表紙席のふりまゝよとをむむ

一 いろはのふりまゝをうすひらり

一 てる字よめる字の字をたると

表紙の字よめる字の字をたると

一 大鼓の字を長し 小鼓の字を

一 早ク留しハ早ク出スソク留しハソク出ス

一 あん字ヲあらトシラテ 留シハ必後字ニハシテ

おとしん末也れぬい事也のれ字ヲあらテ 別

何じもささるや 但おもひはハタトあらはし

一 三より大鼓と下は字をあらと、たまたま、清濁

子侍トて教と仕極れや鼓乃一方は皮とあらはに

ことへていしとまけまへ上てを上はし

一 小鼓と下は字をあらと、たまたま、仕極

字にむむ(あ)あをよと可仕や

一 全字をあらはぬ久字と云はる初の後上れ後のも

いからうりと留つる、余の流きもあらと類し

一 全字をあらはぬ久字と云はる初の後上れ後のも

一 扱了

心得之大変

一心に道なるをその下よみててどうなるか、ぬ極まじりて

五音に大変

一 知り世なるをそのもとよりわぬにれん申えうこい
木といとてうにんなるい、このまうわえまうく
まう、み字かといふくはいといわそとふりとを
福フヤス音にまうてまうりや、口何まうや

二 調子双調のうくういおしなる

一 調子双調のうくういおしなる 物言にうり

三 聲に大変

一 宵よまうまき、暖ひやうにうくうまうそまう
平調より出、特れり、口何まうや

四 二音に大変

一 二音に大変、曲孫一ツに門三ツわらう
めて、口何まうや、口何まうや、口何まうや
道まうぬ、まうし、何るまう

一 二音に大変、口何まうや、口何まうや、口何まうや

一 二音に大変、口何まうや、口何まうや、口何まうや

Handwritten marginal notes on the left side of the page.

一 之は酒間をいしほちあふ一箱をまんとりて

一 用へまほひくまはる物うちり

一 庄屋を舞うまうたゆつてあせせせし

一 一り程乃内へ舞いしと二つと廻りまわると

一 一りまわるとまふまふ一節し

一 拍子十のて三ツそりやむ一とをぬきを庄屋

一 舞いしと二つ程拍子やむはけは物まると

一 一庄あわくとまわくとまわるとまわると

一 のけは入まわり酒をふりまわり同じまふと

一 一りくまるとまるとまるとまると

一 一りまわりまわりまわりまわりまわりまわり

一 ひろくまるとまると

一 一酒をぬきを敷くと酒のまわり酒をぬき

一 一は二は三は四は五は六は七は八は九は十は

一 一りまわりまわり

一 一りまわりまわりまわりまわりまわり

一 一りまわりまわりまわりまわりまわり

一 一りまわりまわりまわりまわりまわり

